

いにしへの讃岐



▲3/21(土)に行われた考古学講座「ナワメスジ 伝承に見る讃岐の道路史～GISの視点から～」(講師：阿部誠吾技師)の様子

埋蔵文化財センターボランティア SNS始めました！

センターのイベントやボランティア活動の様子を発信していきます。是非、フォローをして香川の歴史に親しんで下さいね！



私「失敗もあるよね？」

M「そりゃもちろん。ユンボで遺構面を掘り飛ばしたり、未買収用地を掘ったり……(これくらいで勘弁して!)。でも同じミスをしないように意識してやってきたつもりだよ。」

私「讃岐国府も担当したんだね？」

M「平成の探索事業2年目で、初年度は3人だった担当職員が1人にされて……。とにかくボランティアさんの熱量が凄かったんで、こちらもフルパワーで対応したから疲れたね。国庁の発見とはならなかったけれどここでも人に恵まれて無事に1年を過ごすことができたと思ってる。」

私「教委本課や観光振興の仕事も担当したんだね。」

M「本課では文化財保護法を勉強し市町の担当者とも向き合った。市町の現場をみるといかに県の現場が恵まれているかを思い知ったね。観光振興は全くの素人だったけど周りの助けを借りてどうにかこうにか集客イベントをいくつかこなすことができた。担当したまちあるき観光でも人に恵まれて……特に多度津町の皆さんにはお世話になったかな。忙しかったけどとてもいい経験になったね。」

私「世代交代で若い後輩が増えたけど、最後に伝えたいことある？」

M「自分の若い頃に比べると、やれコンプライアンスだのハラスメントだの個人情報の保護うんぬんだのがんじ絡めの世の中だけど、周りの人と積極的にコミュニケーションを取ってほしいかな。現場も整理作業も調査員1人ではできないことから作業員さんたちと1つのチームという感覚を持って仕事に当たってほしいかな。あと、デジタル万能みたいな世の中になりつつあるけど、手触りというか肌感覚というかアナログ作業も大切にしてもらえるといいかなあ。」

……頬に当たる冷気を感じてふと目が覚めた。開いていた窓からすさまじい風が吹き込んでいる。知らぬ間にMの姿もない。どうやらコタツでうたた寝してしまったようだ。さて、窓を閉めて夕餉の支度にでもとりかかるとしようか……。(宮崎 哲治)



▲調査員 M を悪の道に引きずり込んだ作業員の方々



▲悪に染まった調査員 M を怪人に改造した作業員の方々



香川県埋蔵文化財センター

開館時間 9:00~17:00
休館日 土日・祝日、12/29~1/3
(イベント開催日は開館)
所在地 〒762-0024
香川県坂出市府中町南谷5001-4
TEL 0877-48-2191



ホームページ Instagram X (エックス)



モノを見る眼



復元竈穴住居で語り合う▶

昭和63年（1988）に採用されてから早38年。その時々には必死だったが、今となってはあつという間だったような気がする。

入庁2年目に、綾川町陶にある須恵器窯「奥下池南窯跡」の発掘調査を担当した。前年度、「私なら、こういうふう^{すえ}に発掘をして、成果を出す」と上司に大見得を切ったことを粹に感じてくれたのか、あるいは「そこまで言うなら、やって見せろ」という不肖の息子をもった親の気分だったのか。多分上司の胸中は、その両方だったのだろう。大学の卒論でここを含む十瓶山窯跡群^{とくめやまのまあとくん}をテーマにしていたこともあり、喜び勇んで日々の現場作業に向き合った。

窯跡は、調査前から水路に断面を見せていたため、そこから拡張するかたちで調査区を設定、窯跡本体と関連遺構の調査をすることができた。今、振り返ると、セオリー通りの進め方で、もっと情報を引き出すためにできることはあったように思う。それでも調査班には十瓶山窯跡群研究の先達である田村久雄さん（故人）がいて、田村さんに怒られながら、いろいろ思案した。

窯の調査で、気になっていたことがあった。窯の壁面の裏側に、焼けて炭化した木がある。なぜ、このような部位に炭化材があるのか。いろいろ悩んだのだが、「窯に伴う何らかの施設に伴う可能性もあるが、木材とその掘り込みが不定形で斜め方向に入っていることから、木根が窯の余熱で焼けたものと考えておきたい」などという、わかったような、わからないような中途半端な結論を出してしまった。炭化材は、窯体を掘り込んだ基盤層と、架構された天井部との境目にあり、その付近で天井が座屈・破断しているように観察された。もっと現場でタイムリーに、このことの意味を考えるべきだった、と後になって思う。調査時には、窯を「半地下式」と思い込んでいたことも、まずかった。

平成7年（1995）に結成された窯跡研究会で、須恵器窯の構造をテーマにした研究活動に参加した。11～13世紀に「東播系須恵器」を焼いた窯跡（神出窯跡群）の調査現場を見に行った時、兵庫県教育委員会の森内秀造さんからこれらの窯が「地上式」であることを教えていただいた。基盤層を削り出すか盛り土をして小高くした場所に窯を作り、木の支柱等で天井を架ける窯である。時々、支柱が炭化して残っている、ということもお聞きした。その時、自分の掘った窯跡のことが頭に浮かんできた。

そうか、炭化材は「木根が窯の余熱で焼けたもの」なんかじゃない、天井の構築材だったんだ……。

そう考えると、窯が周囲を掘り込んだ小高い場所に作られていることが、よく理解できた。改めて自分の作った報告書を見てみると、「第19図 崩落窯壁から想定される天井部」として示した復元図は、まさに「地上式」の窯の特徴じゃないか、何という勘違いをしていたのか！

このことが見えてくると、十瓶山窯跡群の他の窯跡についても気になり出した。なかなか調査の機会には恵まれなかったが、令和2年（2020）に綾川町が実施した県指定史跡「すべてと窯跡」の調査を見させてもらい、これも「地上式」と理解できると確信した。「窯は8世紀（7世紀に遡る可能性もある）に採用された構造を改良することなく、終焉期を迎えていることになる」などと発掘報告書に書いてしまったが、全くの誤解だった。遅くとも9世紀には、播磨地方と同じく「地上式」に転換していたのである。このことに気付くまで、四半世紀も要してしまったことは、汗顔の至りとしか言いようがない。もう私自身が軌道修正することは叶わないかもしれないが、若い人たちの奮闘に期待したい。

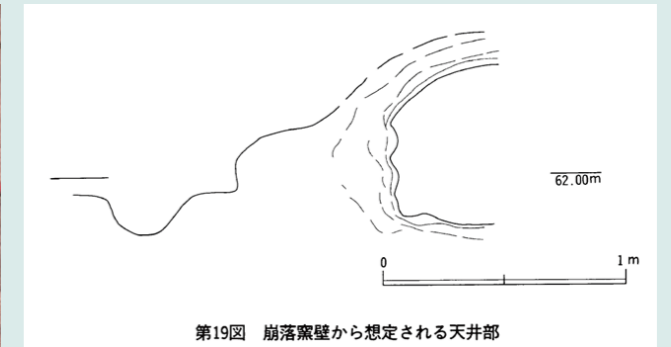
得られた教訓。自分にとって「当たり前」と思い込んでいるモノへの見方は、常に「本当だろうか」と疑い、問い直し続ける必要があるのである。（佐藤 竜馬）



▲綾南奥下池南窯跡の全景。窯の左手には窯に雨水が浸入しないように溝を掘っている。



▲窯体の側壁で確認された炭化材。



第19図 崩落窯壁から想定される天井部

▲発掘調査報告書に掲載された復元図

調査員Mのつぶやき



◀ 纯粹無垢だった頃の調査員M
（入庁1年目、林・坊城遺跡にて）

定年を迎えるにあたり「一筆書け」という宿題を所長から出され、年末年始休みのコタツで頭をひねっていたところへ知人で同業の調査員Mがひょっこり顔を出した。そういえば彼も定年を迎えるはず、ちょっと話を聞いてみよう。

私「Mさんも定年だね。印象に残っている現場とかある？」

M「やっぱり林・坊城遺跡かな。香川に来て最初の現場だし、何も分からない自分を補助員Tジイちゃん率いる綾南組の作業員さんたちに育ててもらったからね。ベルコンの組み方から道具を使うコツ、仕事の指示の仕方はもちろん、さぬき弁やおいしいうどん屋の情報、怪しいビデオまで貸してくれたり……。とにかく笑いの絶えない現場で、これが自分の現場経営の原点になったかな。」

私「暑い中、寒い中、きつい仕事もあるけど、作業員さんと一つになった現場って楽しくていいよね。」

M「ああ。道下遺跡などでは善通寺組の作業員さんに孫扱いされながら面倒見てもらったね。ここでも作業の合間に令和の今じゃマズいようなネタで盛り上がりたりと楽しい現場だったなあ。作業員さんだけでなく上司や先輩調査員にも恵まれてなんとか独り立ちさせてもらったかな。」